

撰論学派の心分説に関する一考察(二)

木村 邦和

前に、真諦所伝の心分説と二唯識観(正観方便)との関連性について検討した。今は、真諦所伝の心分説が中国仏教界においてどのように受容されたかという点について考察する。真諦所伝の心分説は、具体的には、彼によって翻訳された経論と及び疏の中に説かれていたはずである。しかし現存するものは少なく、しかも彼以後の撰論学派の諸師の著作も、撰大乘論世親釈に関するものしか現存していない。故にここでは、まず真諦訳撰大乘論世親釈の心分説を検討し、次に、それが撰大乘論疏章の中にどのような形で継承されているかを論ずるにとどめる。

(1) 梁撰論には三種類の心分説が説かれている。第一は三分説(識体・能分別・所分別)である。すなわち卷五・差別章(大正・三一・一八四b・c)に、

論曰。唯有二。謂相及見識所撰故。釈曰。……諸識中隨一識一分變異成二色等相。一分變異成見。故名唯二。……是一眼識。如三所成。一分能起三種種相。一分能取三種種相。能取者即名見。若意識取意識。一切眼等識及法識為相。意識為能見。復次種種相生者。但意識是種種相生。以三緣境不定。故。其余諸識定緣三類塵。不能分別。能分別則成見。不能分別則成相。

と言ひ、所分別を依他性に、能分別を意識に配当する。これは、分

別章に、分別の三相を述べる意に通ずる。又、眼等五識の場合にも識体が変異して、相見二識を生じ、そこに了別がなされる。しかし眼等五識の能取分は三分別(自性・憶持・顯示)を具えていないから、能了別ではあるが能分別ではない。

第二は二分説(識体・能取)である。すなわち、

論曰。分別性相者実無有塵。唯有二識体二顯現為塵。是名分別性相。釈曰。如無我等塵。無有別体。唯識為体。不以此識為分別性。識所變異顯現為我等塵。無而似有為識所取。名三分別性。(大正・三一・一八二・a)

と言ひ、ここで、「識」と「識所變異顯現」とは厳密に區別して使われており「識」は能取を意味し、「識所變」は所取分を意味すると考えられる。故に識体と能取分とを依他性に配する。

第三は一分説(本識)である。すなわち、本識と本識相貌との関係について、卷五・分別章(大正・三一・一八八・a)に、

論曰。復有二義。由此一識成一切種種識相貌。釈曰。此更問復以何道理。唯是一識或成八識。或成十一識。……此下釈三不異義。欲顯依他性具有三性。一識從種子生是依他有。種種識相貌是分別。分別実無所有是真實性。……一識謂一本識。本識變異為諸識故言識識。今不說變異為根塵。故但言識識。……

所余即阿陀那識。生起即六識。變異為七識。即是本識相貌。と言ひ、ここには本識所變異の根塵には論及しないが、同じく識所變異たる種種識を分別性であると言ひ、根塵も分別性とするのであろう。故に、本識体のみを依他とする一分説である。尚、この文は他訳にも、無性釈にも無いから、真諦独自の見解であろうと思われる。

(2) 如上の三説を指摘する一文が円測の解深密經疏中にある。然此三相體性寬狹。諸説不_レ同。且依真諦三藏説云。(a)第八類耶名_二依他起_一。眼等七識為_二分別性_一。依他無生分別無相為_二真實性_一。(b)又解。眼等八識為_二依他起_一。所變相分為_二分別性_一。……(c)又解。眼等八識見分相分名_二依他起_一。妄所執境為_二分別性_一。……如上兩解理且不_レ然。眼等八識及諸相分等從_レ緣生。云何偏説_二第八類耶一名_二依他起_一。眼等七識為_二分別性_一。(足統一三四—三七四左上)この中、(a)は梁摂論第三説(一分説)にあたり、(b)は第二説(二分説)にあたり、(c)は第一説(三分説)にあたる。円測がどの文献によつてこの解釈をなしたかは不明であるが、恐らく梁摂論自体によつたものではないかと思われる。

(3) 既に梁摂論の心分説が三種類あるとすれば、摂論学派諸師の著作たる撰大乘論疏章は、当然これら三説を並記すべきであろう。しかるに、一説又は二説を記すのみである。

まず、撰大乘論章には、
世諦門中七識六識是分別性。……阿梨耶識名_二依他性_一。(大正八五・一〇一四b)

第七三性分別者。……今且就_二一麁細分別_一。本識心細能持淨染名為_二依他_一。六七心麁分別_二名_二分別性_一。(大正八五・一〇一六b)と言ひ、第三説によつてゐる。尚、第一・第二説を述べる箇所は見出せない。

次に、撰大乘義章卷第四は、七八諸識体を依他とし、七八諸識用(妄塵と妄心)を分別性とする。これは、生起識の段階に於て一分説を採用するものである。従つて本識の段階に於ても一分説、前の第三説—を採用するものと考えられる。故にこの説は第三説を敷衍

したものと言える。尚、第一・第二説を述べる箇所は見出せない。又、撰大乘論疏卷五と及び巻七には、相見二識を言うが、これを三性に配当して解釈する箇所は無い。

このように、摂論学派は概ね第三説を繼承している。

(4) 梁摂論の心分説は三種あつた。第一は三分説、第二は二分説、第三は一分説である。この中、真諦独自の学説は、第三の一分説であり、他の二説は無著・世親の学説である。真諦以後の摂論学派は概ね一分説のみを繼承する。では、何故に一分説のみを繼承するのであろうか。これは第一に二分説が真諦によつて否定されていることによる。すなわち転識論に

起三種分別等者一一識中皆具_二能所_一。……能即依他性。所即分別性。……由_二如此義_一離識之外無_二別境_一。但唯有_二識義成_一。既未_レ明_レ遣_レ識。惑乱未_レ除。故名_二不淨品_一。(大正三一・六一・下)

と言ひ、二分説にもとづく唯識観は不淨品であるとして退けるのである。又第二に、若し三分説を採れば、本識相貌たる見相二識は依他性となり、一分説が成立しない。或は三無性に関して、依他・分別の同一無性が真實性であるとの説も立てられ得なくなろう。

このように、真諦所伝の心分説は三種類あつたが、摂論学派の諸師は、これらの中、真諦独自の学説たる一分説のみを繼承したのである。

1 大正三一・一八六c—一八七a。

2 円測は解深密經疏に真諦の釈文を引くが、この中唯識に関するものは、解節經記・梁論記・九識義記の三種である。円測は恐らく梁論又は梁論記によつたと思われる。

3 印仏研二四—二四二を参照されたい。